

フロンドの乱の「魂」、ロングヴィル公爵夫人の場合

泉 敏 夫

Résumé

«L'âme» de la Fronde, la duchesse de Longueville

Toshio Izumi

En janvier 1650, éclatent les seconds troubles de la Fronde, avec l'arrestation des princes par l'ordre du cardinal Mazarin. La duchesse de Longueville qui s'est enfuie en Normandie, tout en persistant dans sa résistance à la cour, a déclaré ce mot célèbre : «Je n'aime pas les plaisirs innocents.» Quelle signification comporte une telle affirmation dans sa vie?

L'auteur de la *Histoire Populaire de la France*, à l'égard du trait caractéristique de cette nouvelle Fronde, expose ses vues suivantes : «L'âme de cette révolte fut encore la duchesse de Longueville.» Pourquoi peut-on caractériser la duchesse comme âme de la Fronde?

On croit et dit généralement que la duchesse a quitté le monde dès 1654, à l'âge de trente-quatre ans et qu'elle est entrée dans la vie de pénitence pour suivre les voies de Dieu. Cette vie fait un vif contraste avec celle qui était si brillante, pleine de l'ambition et de la fierté dans la première partie de sa vie. Est-ce que la duchesse avait la double existence?

Nous essayons d'élucider ces trois questions, en poursuivant le tracé de sa vie.

D'abord, à propos de ce mot célèbre, on pourrait y relever sa volonté ferme et la fierté propres à la princesse du sang, avec lesquelles elle prend une attitude inconciliable envers la cour, quoique ce mot exhale l'odeur d'immoralité.

Et puis, la duchesse de Longueville s'est jetée dans la Fronde pour se venger de la reine et de Mazarin. Il faut remarquer aussi qu'elle avait en elle le désir invincible de dépasser la réalité, en aspirant à la liberté. Ses actions éclatantes et sa résistance courageuse dans les troubles de la Fronde, ont paru pour le peuple français les marques de la révolte à la cour et de la révolution de la société. On aurait dit donc : «L'âme de cette révolte fut encore la duchesse de Longueville.»

Enfin, ce qui règne dans sa vie de dévotion qui succède à la conversion : ce sont l'allure austère dans l'acquittement des devoirs terrestres, avec l'âme tout donné à Dieu, la volonté ferme qui ne permet pas le compromis aisé, soit lors de la succession du titre après la mort de duc de Longueville, l'opiniâtreté et la passion dans la résistance pour les entourages ; tout cela rend témoignage de la puissance de l'héroïsme. On pourrait dire que cet héroïsme, noble esprit reste inchangé depuis qu'elle s'est mêlée à la Fronde. La dernière moitié de sa vie n'est pas la métamorphose.

第二期のフロンドの乱は1650年の1月にコンデ公（1621～1686、ロングヴィル公爵婦人の弟）の逮捕、投獄をもって始まる。1649年3月リュエイクにおいて、王廷側とフロンド派の間で第一期フロンドの乱の講和の調印が結ばれてから、10ヶ月も経たないうちである。コンデ公の友人達は彼の投獄に抗議し、地方で叛乱軍を組織していた。ロングヴィル公爵夫人（1619～1679）とマルシャック（1613～1680、のちのラ・ロシュフコー公）は共にノルマンジーへ逃れた。

1863年刊行の三巻からなる *Histoire populaire de la France* の第3巻56章において、この第二期のフロンドの乱の特質につき次のように述べられている。《L'âme de cette révolte fut encore la duchesse de Longueville.》「この反抗の魂はなおもロングヴィル公爵夫人であった」⁹⁾と。17世紀中葉、フランスをあれほど震駭させた、絶対王政に対する批判としてのフロンドの乱の特質に、一女性を据えたのはいかなる理由によるものか。

次に、同夫人が第二期フロンドの乱の初期に、《Je n'aime pas les plaisirs innocents.》「凡そ罪のない楽しみなんて、私は好きじゃありませんわ」⁹⁾と有名な科白を洩らしたが、果してこれを文字通り、夫人の背徳の一面を示す言葉と見做してよいのかどうか。

さいごに、彼女は1654年8月に回心し（時に34歳の若さであった）、爾来25年にわたる悔悟の余生を送ることになるが、この生涯は回心前の彼女とは別の顔なのであろうか。

以上三つの問題に焦点をおき、愛と野心、反抗そして後年の悔悛の生涯を考察しながら彼女の実体を明らかにするのがこの小論の目指すところである。

1

まず、ロングヴィル公爵夫人に焦点を置きながら、フロンドの乱勃発の原因とその中身を考察する。

16世紀には、フランス女性は社交界を考え出し、自らその中心となった。17世紀にはそれ以上のことを望む。つまり「教養と才能にかんして実権をにぎること」⁹⁾であった。ロングヴィル公爵夫人はまさにその17世紀の女性の典型として、サロンや社交界に留まらず、政治の世界において実権をにぎろうとしたといえよう。

ロングヴィル夫人は、1619年に王族の筆頭であるコンデ家にアンヌ・ジュヌヴィエーヴ・ド・ブルボンとして生まれた。父はコンデ公、母はシャルロット・ド・モンモランシー（アンリ四世の最後の愛人）であった。アンヌは、後世においてもサント・ブーヴから「不滅の魅惑」《un enchantement immortel¹⁰⁾》と称えられるほど、後述するごとく同時代において、凡ゆる点で惹きつけるところがあった。娘時代、貴頭の世界に混じわり王女としての素養を積む一方、カルメル会と永く関係して敬虔な信仰を育み、一時は修道尼を志したという。その為、父公はランブイエ夫人のサロンへ通うことを促した。館では当代一流の文人たちと交わることであり、社交術と教養を身につけ、小説に耽り、悲劇を見てはヒロインにわが身をなぞらえ涙する

多感な女性であった。

アンヌは、1642年6月、23歳で、男やもめのロングヴィル公爵と結婚したが、そのいきさつを、ポール＝ロワイヤル史研究家セシル・ガジェは次のように述べている。

このニュースには驚かないではおられなかった。コンデ公の娘にとっては酷な運命といえた—これはグランド・マドモワゼル（ルイ13世の弟、ガストン・ドルレアンの娘、従ってルイ14世の従姉、1627－1693）の言葉である。たとい高位の貴族とはいえ、ロングヴィル公爵は王族の下位に過ぎなかった。従って彼女は彼と結婚することにより身分を貶したことになる、その上年齢の不釣り合（彼は25歳年上）は彼女にとって小説のヒーローとなり得なかった。さらにつけ加えるならば、彼は男やもめであり、義母となる彼女より辛うじて若い、のちにヌムール公妃となる一女の父であった⁶⁾。

しかしロングヴィル公は争いを好まず、平穩を求め、何人に対しても抗うことを好まず、この点で確かに女丈夫と連れ合って暮らせる夫ではなかった。

さて、ロングヴィルの美しさについて、レス卿やラ・ロシュフコーなど同時代人の証言が多くなされているが、セシル・ガジェの書よりモットヴィル夫人の言葉を引用しよう。

彼女を見て愛せざるを得ずまた彼女にとりいろいろとしないものはない。彼女の美しさは、彼女の目鼻だちの完璧さよりは彼女の顔色のなかにあった。目は大きくはないが美しく、優しく輝いていた。その碧眼はすばらしく、その青い色はトルコ石にまごうばかりであった。詩人たちは彼女の顔に現われている白さと肉色を、百合とバラの花に比べるほどであった。多くの美事なものを秘めた黄金色に波打つ髪は、彼女が一人の女というよりは、私たちの生来の弱さのために、私たちが想像するがままの天使に似させた⁶⁾。

当時サロンとしてバリ有数の聲望を誇ったランブイエ館へ、やがて彼女は現れることとなり、そこでセヴィエ夫人やラ・ファイエット夫人に近づき、いよいよフランソワ・マルシアック殿、未来のラ・ロシュフコー公爵と出会うことになるであろう。

このマルシアックはロングヴィル夫人の心を奪ってしまうが、その理由について、クロード・デュロンはつぎのように述べている。

もし彼が愛人を征服し得たとするなら、彼女が待ち望んでいたもの、つまり自らの威光の、あるいはむしろ彼女の有用性の感情を、彼のみが与えることができたからである。なんとすればロングヴィル夫人にとって美しい王族であるだけでは十分でなかった。彼女は現実をのがれねばならなかった。そしてその現実とは、彼女にとって、愛せない、彼が嫉妬を示す勇氣があれば評価したかも知れない23歳年上の夫であった⁷⁾。

そしてロングヴィル夫人は栄誉《gloire》を求め、彼女の財産、休息のすべてを犠牲にしたのである。それをさらに掻き立てたのはマルシアックであった。現実をのがれる媒介として国事に関わり、そこで英雄的な働きをする、その行為自体の喜びと、世の喝采を一身に集めるという栄誉を獲る、ここにロングヴィル夫人の政治参加の真因があると考えられる。

しかし、一女性の野心のみでフランスを二分した騒乱が起るとは考えられない。当時の社会・政治情勢における人心の動きと切り離して考えることはできない。

前掲書、*Histoire populaire de la France*によれば17世紀の中葉、国家財政の窮乏、度重なる諸税の増額による物価の上昇に民衆は苦しんだ、たとえば、小麦の、1スティエの値段は1648年の初め10リーヴルであったものが、同年7月17リーヴル、同年秋には36リーヴルに高騰する。民衆の生活は圧迫を受け、民衆の宮廷に対する非難、不満は高まっていた。とくにリシュリユー（1585～1642、枢機卿にしてルイ13世の宰相）の治政の晩年には財政はますます窮迫をつけ、悪行政がそれに輪をかけた。他方税金の取立ては厳しくなり、納税不能のものが投獄され、1646年にはフランスでは23,000人の囚人がおり、そのうち5000人が死んだとさえいわれている。「オメ・タロンは＜1648年1月に王国全土は栄養失調に罹っている。農民は金銭に変えるものがないから、持っているのは魂だけだ＞とのべている」⁸⁾。

宮廷では財政立直しのため、富裕税、トワゼ税設置、入市税の増額を図り、他方手当、年金の削減措置を行う。これは市民、年金生活者や法律家を怒らせた。宮廷に対して組織的に抗議したのがパリ高等法院である。この機関は一種の大審院として、国の司法を担い、かつ原理的には王令を登録する権利をもつ、いわば専制から国を守る役目を果たすわけである。17世紀はじめには、国内8都市に高等法院があったが、パリ高等法院はフランスの3分の1を管轄しており、宰相リシュリユーの死以来、「人民の生まれながらの保護者⁹⁾」*Protecteur-né du peuple*と呼ばれていた。1646年にパリへの商品入市税の増税が行われたが、それに高等法院は反対した。さらに1648年に4つの政府機関、高等法院、会計院、補助税法廷、それに顧問会議のメンバーが「民衆と個人に仕え、国家の濫費を改革するため」に集まる。マザラン（イタリア出身、1639年フランス国籍獲得、1642年枢機卿、1643年ルイ13世の死後、宰相となり、幼き国王と摂政アンヌ・ドートリッシュ太后妃に仕え、＜まったく誠実さに欠け、しばしば利益本位の彌縫策に終始した。＞¹⁰⁾）は、上記の会議の主張—フランスに新しい憲法を与えよという—の審議を一応認めた。彼らは王政の基本法となるべき27箇条を提起する。その中でもっとも重要なものは次の通りである。

税金が、将来においてパリ高等法院の自由なる投票により審議されかつ登記されない限り、税は合法的には認められることはできないであろうということであった。これは官職売買の制度によってその役職を買取った200人の法官による、貴族制への法権力の介入を意味した。他の1つは地方の知事を廃止することにより、レス枢機卿の言葉によれば、リシュリユーによって創設された行政中央集権に深刻な打撃をもたらすものであった。この知事は祖国の圧制者であり、貴族を厚く擁護する者と呼ばれ、専制権力の卑しい追従者であった。4団体のメンバーは当時の事態の核心を衝いていた。というのは彼らは、個人の自由のための正当な保証を、また封印状や特別法廷の撤廃を要求し、とりわけ、いかなる人間も王令により逮捕された場合24時間で訊問され釈放されるべきであると要求していたからである¹¹⁾。

しかし、折しもコンデ公の軍隊はランスの戦いで勝利を占めていた。その時、10歳にもならなかった王はその報に接して「高等報院はとても困るであろう¹²⁾」と叫んだ。この大成功は枢機卿に勇気を与え、27箇条の要求に答えるどころか、2人の頑固な法官たちを逮捕させることを決心した。この中に民衆に熱愛されていたブルッセル Broussel (1575～1654) が含まれていた。

彼の逮捕に民衆は一斉に蜂起した。この状況をアルヴェード・バリエヌは1912年刊行の *La Jeunesse de la Grande Mademoiselle* においてつぎのごとく述べている。「蜂起は2人の高等法院議員の逮捕に抗議するパリ民衆の答えであった。民衆の眼にはその一人の老ブルーセルは、大義のために死んだバリヨン議長の人道的、民主的理論を体現していた。パリの町は一挙に立ち上った¹²⁾」。結局、民衆の一斉蜂起のためマザランの陰謀は破れ、ブルーセルは釈放されたが、この事件はフロンドの乱の前哨戦と言うべきであろう。

他方、大貴族たちの動きはどうか。ラ・ロシュフコー家では、ルイ13世の宰相リシュリユーに対する憎悪は消えてはいなかった。リシュリユーが亡くなって解放感を味わったのも束の間、別の枢機卿（マザラン）が現れ、宮廷に対する不信感は依然としてこのこる。嫡子マルシアックは、リシュリユー時代に宰相に逆って王妃を守ったりしたこともあったが、マザラン宰相の時代になって、愛人シュヴルーズ夫人（1600～1679）のスペイン逃亡幫助の罪の科で、一時牢獄につながれたことがあるが、今は許され太后妃アンヌ・ドートリッシュの忠実な臣下として仕えており、その故に報奨を期待していた。しかし一向に沙汰がないことから「王妃と枢機卿マザランに対して彼の憾みを示すという危険な道を求めることに決心した¹³⁾」。なお彼がフロンド党派に結びつけることになった他一つの理由に、彼の妻が Tabouret「床几」の特権を取り上げられたことを知ったことが挙げられる。「床几の特権」とは王妃の側で坐る権利のことである。さらに重大な他の理由は、彼の政治界への野心である。当時、マザランに立派に対抗できる諸侯の中に、ラクロワでスペイン軍を打ち破った声明轟きわたっているアンギャン公（のちにコンデ公）がいた。マルシアックは公に近づくべく策略をめぐらす。クロード・デュロンはこの経緯をつぎの通り述べる。

アンギャン公の愛顧を得るために、彼が愛していた公の姉ロングヴィル夫人がいた。この路こそもっとも確実であろうし、また確かにもっとも好ましかった。

ジュヌヴィエーヴ・ド・ブルボン、ロングヴィル公爵夫人は27歳であった。（マルシアックは33歳）¹⁴⁾。

ロングヴィル公は彼の領地の一部を支配することを許されなかったので、王廷に対して不満を抱いていた。

ゴンディ（1613～1679、のちにレス卿）はパリの大司教を叔父にもち、幫助司祭であったが、大臣職への第一段階である枢機卿を夢みる生まれつきの陰謀家であった。彼は当初、コンデ公一族を反乱軍の頭に戴こうと考えていた。しかしコンデ公は反乱を好まず、またパリ高等法院のブルジョワ等を軽蔑しきっていたために、彼等と同盟することを拒否し、反乱軍の先頭に立たなかった。コンティ公は姉ロングヴィル夫人に対し熱愛を捧げていたが、結局彼はフロンド党派の総司令官となり、兄コンデ公は国王軍の総司令官となり、兄弟相せめぐ結果となった。

1649年2月にロングヴィル夫人は一人の息子を出産した。パリ中がそれを祝し、名付親となった。Charles-Paris と名付けつけられ、ロングヴィル公は自分の子であると疑わず Saint-Paul 伯爵の爵位を与えた。やがてマルシアックは負傷するが、彼は当初執拗にロングヴィル夫人を叛乱に誘ったにもかかわらず、このたびは宮廷と談合しようとしていた。

1649年3月13日、リュエイユで和解が結ばれ、マルシアックは大赦の中に含まれることになる。第一期のフロンドの乱は終わる。

1649年8月、アンヌ・ドートリッシュ太后妃はパレ・ロワイヤル宮に戻るが、これはコンデ公の働きによるものであり、彼女は変わらぬ感謝を公に確約し、公を三番目の息子と見做すとさえ述べた。しかしこのような甘い言葉は守られるはずがない。クロード・デュロンはつぎのように述べている。

リュエイユの和議は偽装であり、マザランは大貴族たちにした約束すべてを履行するつもりはなかったし、大貴族たちが間もなくそれに気付くであろうことは公然の噂であった¹⁶。

マザランは巧みにパリ民衆の心をつかむために、彼らの憎しみをコンデ公に向けようと画策。他方、コンデ公は信用回復にフロンド党派と和解せざるを得なかった。そしてロングヴィル公のかねてよりの領地獲得の要求とマルシアックの妻の「床几の権利」の復活要求を宮廷側に取りなしすることになった。マザランは約したが、守られるはずはなかった。コンデ公は公然とマザランを罵ることになる。ロングヴィル夫人はマザランの遠望術策を見抜き、パレ・ロワイヤル宮へ行かないように警告していたが、コンデ公、コンティ公およびロングヴィル公の3人は忠告を聴かなかったため、1650年1月マザランに逮捕され、ヴァンセンヌの牢獄へ投げられてしまった。

マルシアックはロングヴィル夫人とともにノルマンジーへ逃れ、ルーアンの高等法院を蜂起させようとするが失敗した。二人は別行動を取ることにし、マルシアックはポワトゥに叛乱を引き起こすべく同地におもむき、ロングヴィル夫人はマザランの追求をのがれ、あるいは海路をとり、あるいは町々をさまよい危険を冒した末オランダを経て、コンデ公の城塞にいたテュレンヌ將軍の許に落つく。この地ストゥネーはやがて叛乱の據点となる。1650年2月にマルシアックは彼の父の死によりラ・ロシュフコー公爵となる。

フロンド党派の形勢はかんばしくない。にもかかわらずロングヴィル夫人は意気盛んであり女丈夫振りを発揮していた。当時夫人は《Je n'aime pas les plaisirs innocents.》「凡そ罪のない楽しみなんて、私は好きじゃありませんわ¹⁶」と述べたが、その同一人物が、11月にボルドーにいたラ・ロシュフコーに彼女の息子たちの安全を守ってくれるように頼み、次のようなどちらかといえば暗い手紙を送る。

私はあなたに私の身内に関わることをお話し、そのお世話を願うことをお詫びせねばなりません…私はあなたに与えているこれらの苦勞すべてについて、ほんとうに日に何回も恥かしく思っているのです。そしてこれには、あなたが私のために行動して下さる振舞いが私に感じさせる喜びの中に、真の苦しみが混っているのです。私はあなたに少なくともつぎのことを誓いたいと思います。あなたの善意はかならず成果を生みます。それは私の心情に優しい成果を与えてくれますので、かつてより以上に私をあなたに結びつけることになるでしょう。私は最初、愛情によってあなたに結ばれました。今は義務によってそうであることをとても喜んでいきます¹⁷。

誠意溢れた依頼文である。ここには息子たちに対する深い愛とラ・ロシュフコーに対する厚

い信頼が底流にある。先述の勇壮な言葉、悪の華を匂わすような言葉とは裏腹である。フロンド時代の夫人の特徴を表すものとして「罪のない楽しみなんて私は好きじゃありませんわ」が引かれるが、これしも単なる上面の解釈だけでは夫人の本質を捉えることはできないであろう。これについては2で分析することとする。

さて、パリでは、下獄中の公達の釈放運動が、友人たちによってなされる。マザランはラ・ロシュフコーとひそかに会い講和の準備をする。いよいよ公達の釈放が公表されるや、パリの民衆は一斉に武器をとり、歓呼の花火で公達を迎えた。他方民衆はマザランが退去することで満足するどころか、その首をさえ要求した。マザランは公達を獄から放つと同時にラインの彼方へ避難する。

陰謀がめぐらされていた。それはシュヴルーズ夫人の姫とコンティ公との結婚問題である。もし約婚すれば二つの最有力な親王家の血統の同盟が、宮廷勢力に対抗して調印されることになる。しかしこの陰謀は成功しない。ロングヴィル夫人の強い反対のためである。それを知ったレス枢機卿は復讐として、ロングヴィル公に、夫人とラ・ロシュフコーの関係を曝露するのである。ロングヴィル公は怒って夫人に領地に戻るよう命ずるが、夫人は応じない。

ロングヴィル夫人の末路はどうなったか。末路というのは不適當かもしれない。晩年彼女には輝かしい第二の人生が待っており、栄誉心と愛の廃墟の上に、悔悛に満ち恩寵に浸りながら、世人から彼女の美德と篤信に称讃を受けながら26年の修道生活を送るのであるから。しかし支持者を失いながら、栄誉という迷妄が打ち破られにいたる第一の人生は少なくとも末路としか言いようがない。

ラ・ロシュフコーとコンデ公は彼女に休戦するように説いたが、彼女は聞きいれず遂にラ・ロシュフコーと対立するようになる。

1651年の秋には、ラ・ロシュフコーは、夫人とヌムール公との軽薄な情事を口実とすることによって、ひそかに彼女から離れはじめていた。

諸侯達は釈放されたあと、ロングヴィル公はノルマンジーに引きさがり、コンデ公とコンティ公はギュイエンヌにこもっていた。同地は反乱の中心となっていた。セシール・ガジエは次のようにフロンドの乱の終局に間近い状況をまとめている。

ロングヴィル夫人は2人の弟に会いに行き、戦いを起こすように促した。巷間では、戦争は2人の女性の事実、太后妃はマザラン枢機卿に再見しようとし、ロングヴィル夫人は夫に会いたくなかったという事実から続けられたといわれた。幸いにも終局は近づいていた。それはチュレンヌ元帥のの王廷に対する義務への復帰が急速に進められたからである¹⁸⁾。

1653年7月には、姉を熱愛し、彼女に帰依を捧げつづけてきたコンティ公も彼女を見捨てることになる。彼女はボルドーから去らざるを得ず修道院に身を隠す。夫人の完全な敗走とともに、マザランは再びパリに凱旋した。第二期フロンドの乱の終焉である。

2

ロングヴィル夫人は一般に1654年8月に隠棲生活に入ることを決意したといわれる（彼女の

回心時期は34歳であり、1656年にポルドー協定によって身分、名誉、財産、自由は復権された)。たとえばドゥコーは、彼女は宗教書を読んでいる時、突然啓示をうけ信仰が甦えり、その後「自己放棄の道」¹⁹⁾をたどったと記している。しかし1855年に刊行された *Nouvelles Etudes, Historiques et Littéraires* では、キュヴィリエ＝フルーリは、夫人の回心ときわめて独自の隠遁生活を詳細に分析しているが、それによると、夫人の改悛の生活は単なる隠遁ではない。

彼女は魂を神に捧げながら、地上への関心を失っていなかった。彼女は妻として母として、後見人として、王家の妃として、コンデ公の姉として、キリスト信仰者として勤めるのと同じく、彼女の義務の何もかも蔑ろにすることもなく、すべての義務を受け入れようと努めた。彼女はサブレ夫人 (1599～1678) のように孤独の劇を演じることはなかった²⁰⁾。

つまり「彼女は地上に留ったまま神の帰依したのである」。彼女は夫に忠実であった。夫人の生涯に心動かし、正確な観察眼をもっていた歴史家 Villefore ヴィルフォールは次のように述べている。

…彼女はロングヴィル公に口先だけでなく、きわめて誠実な尊敬の証しを示そうと努めることから始め、彼の領地への巡回に常に同行し、領地の管理をし、公の健康をも気付かったので、彼はついに彼女に頼り始めた²¹⁾。

またジャンセニストのためにルイ14世へ有利な証言をしたためた手紙、及び彼女の二人の息子の教育と将来をコンデ公に相談した手紙、この2通にキュヴィリエ＝フルーリはロングヴィル夫人の英雄的資質を見抜いている。われわれは、フロンドの乱の真中、マルシャック (ラ・ロシュフコー公) に二人の息子のことを頼んだ誠実あふれた手紙のことを想起するが、キュヴィリエ＝フルーリは「コンデ公の姉の内的生活でもっともドラマティックな部分²²⁾」つまり「彼女の心情の中で、その卓抜さをもって際立った資質がくりひろげられた²²⁾」部分があると指摘している。それは、1664年のロングヴィル公の死後における二人の息子に対する彼女の態度である。その時、長子デュノワ伯は18歳、彼は身体が不自由であり、智恵おくれで (セシル・ガジェは「ほとんど白痴である²³⁾」とさえ述べている) 性強暴であったという。彼はロングヴィル公夫婦の嫡出子であった。次子は当時15歳、サン・ポール伯で〈フロンドの乱の子〉と名付けられている通り、1649年1月、ラ・ロシュフコーとロングヴィル夫人の愛の結果として生を享けた。サン・ポール伯は母の血を継ぎ才気に富み、美丈夫で举措も英雄的であった。当然家督問題が起る。すでにロングヴィル公の存命中から、世人はもとより、コンデ公も、ロングヴィル公 (公自身不義の子であるを知っていた) さえ、サン・ポール伯に家督を譲るべきであると考えていたが、ただひとり夫人のみがそれに異論を唱えたのである。夫人は同じくポール＝ロワイヤル＝デ＝シャンに通う信仰の友サブレ夫人に打明けている。キュヴィリエ＝フルーリによると次の通り。

世間は私にサン・ポール伯にまさに不正義のそして不可能なことをせよと求めます……しかし彼が支配するようになればすべて崩れてしまうに違いありません。たしかに今、彼は世上の偶像です。しかし、神のご加護により、誓って私の偶像ではありません《Par la grâce de Dieu, ce n'est pas la mienne!》²⁴⁾。

われわれは、この断言に彼女の心の髻を読み取ることができるであろう。さらに彼女はコンデ公に決然と「私の長子（デュノワ伯）はどのようであれ私の息子です²⁵⁾」《Mon fils ainé est mon fils, de quelque manière qu'il soit fait》と言う。彼女の心の内奥でどれほどの闘いと苦しみがあったか想像に難くない。ここに彼女の自制心、鞏固な意志を汲み取ることはできないであろうか。

キュヴィリエ＝フルーリは次のような問いをなげかけている。

…サン・ポール伯は、彼の母の悦び、慰み、そして希望であったのか。それとも逆に彼女の後悔であるばかりではなく、罪であったのか²⁶⁾。

鋭い問いかけであり、これは女性として、母として、人間として、信仰者としてのロングヴィル夫人、またフロンドの乱における波瀾の生活を送った彼女、そのすべてを統合した一女性の真実を、歓喜と後悔の呟きの渦巻く中で浮き彫りにしようとしたといえよう。この問いに対しわれわれはどちらも真であると答え得る。しかし彼女は敢えて後者を選んだ。ここに彼女の輝きと偉大がある。しかし、このあと彼女に不幸が相継いで襲う。セシール・ガジェの前掲書によれば、1672年、長子デュノワ伯は母の反対を振切ってイタリアに赴き聖職者に任ぜられた。しかし彼の狂気はこの地位を辱かしめることになる。

法王が、ルイ14世の支持を得たコンデ公の要請によってデュノワ伯を聖職の位に任じた。王は『彼の身分の名誉を傷つけることになる祭司職に、この若者を就けるために時をのがすべきではない』と語っていたという²⁷⁾。

夫人の知らない間に運ばれたこの事件には、コンデ公の遠謀が推し量られるであろう。

つぎに、彼女に致命的な衝撃を与える事件が起こった。サン・ポール伯が亡くなったのである。デュノワ伯のイタリア行きと同じ年である。セシール・ガジェは次のごとく述べている。

デュノワ伯が聖職段階をしたために、サン・ポール伯は長子より家督、諸特権を受け継いだ。彼の軍隊における評価、彼の美しい容貌、社交界における成功は声望を高め、母を喜ばせていた。しかし他方、彼女がひそかに熱愛している息子が、彼女に愛を報いてくれないだけ、さまざまに彼女を苦しめていたことも事実である²⁸⁾。

コンデ公も彼をかわいがり、囑望していた。ラ・ファイエット夫人は「サン・ポール伯の才智は驚くべきほどでした²⁹⁾」と述べていた。しかし彼はライン河の戦線中、コンデ公の傍で亡くなったのである。セヴィネ夫人は、戦死の報に接した時のロングヴィル夫人を次のように描いている。彼女は「ベットに倒れ伏して、烈しい苦痛のひきおこす、痙攣や気絶をくりかえし、苦い涙を流し、神に祈り、深い愛惜にみちた嘆きに身をもんだ³⁰⁾」と。セシール・ガジェは、ラ・ロシュフコーの受けた衝撃をつぎのように述べている。

事の次第を知悉しており、彼ら二人にとって、その悲嘆がどれほどまでにえぐるような愛情と混じり合ったかを思いやったセヴィネ夫人は、『ラ・ロシュフコーの涙は心底より流れていました』と告げている³¹⁾。

息子の死のあと、すべての希望を失った夫人は遂に隠棲することになり、カルメン会から借りたサン＝ジャック街の小さな館と、ポール＝ロワイヤル＝デシャンによって建てられた邸と

の間を往き来し、信仰と慈善の生活に没頭したという。

3

われわれは以上、野心と恋愛に激しく燃え、陰謀の張りめぐらされた政治界に女性の総帥として威風を靡かせた輝かしい20歳代より30歳にかけてのロングヴィル夫人と、回心後の篤信生活において世俗を断ちながらも、王家の妃として、妻として、母としてもちもちの義務を果す健気な同夫人を追ってきた。

さて、人口に膾炙された「罪のない楽しみなんて、私は好きじゃありませんわ」という科白は、彼女の性悪の一面を表すものであろうか。次に「フロンドの乱の魂はなおもロングヴィル公爵夫人であった」という評価の中身は、いかなる意味をもつか。そして、ロングヴィル夫人の回心前とその後の生き方は対照的なようだが、果して回心後の彼女は全き転身であったかどうか。以上三つの問題点について考察したい。

まず、上記の科白を洩らした状況を捉えることが必要であろう。マザランの二枚舌と狡猾さと王権によるコンデ公はじめ三人の公達の不当な逮捕のため、第二期フロンドの乱は起こり、ロングヴィル夫人は逃亡する。そのあとをマザランは700人の追手を送り逮捕に向ける。彼女には大義がある。つまりマザラン側の理不尽な武力行使に対する怒りと抵抗である。こういう状況下で、しかも危険を顧みない毅然とした精神の言表として同科白を解すべきであろう。この解釈が可能なのは、科白の発せられた当時における夫人の心境についてのクロード・デュロンによる解説である。

ロングヴィル夫人が脅えていると描き出すことは、彼女に対し屈辱を与えることになるだろう。彼女の取巻きの一人の男性が、彼女の強情さのために陥る危険の数々を示唆した時、彼女はあの有名な言葉、「罪のない楽しみなんて、私は好きじゃありませんわ」と答えた³²⁾。

このような彼女の強さに、英雄的行為自体の悦びと自由な生き方への誇りが絡み合っていたと考えられる。その上、マルシャックとの愛情の燃焼は明らかに彼女の内奥では責任倫理からの批判をはらんでいたであろう。あるいは、外からの批判を真向から受けとめようとした強い精神の現れとも解し得よう。このようなそれぞれの心的・感性的要因の複合が科白にこめられているのである。

回心前と後との彼女は異なる人物であるように見える。しかし、彼女の個性的な生き方を分析すれば、全生涯にわたって世界に対する共通した姿勢が見出されるであろう。それは緊張と葛藤である。クロード・デュロンはマルシャックと夫人との関係の分析をしているが、そこに彼女の姿勢がうかがえる。

もしマルシャックがこのように愛人を支配したとしても、それはただ彼女が待っていたものを彼が与えたからである。というのは、ロングヴィル夫人は美しく、また親王家の王女であるだけで十分ではなかった。彼女は現実からのがれなければならなかった（《Il lui fallait encore échapper à la réalité³³⁾》）。現実とは彼女にとって、愛しておらず、もし彼があえて嫉妬深かったならば尊敬したかも知れない23歳年上の夫であった。

ロングヴィル殿は、妻よりわずか年下の先妻の娘がいた。このロングヴィル嬢はあまりにも輝かしい義母を憎み、後世に書き残した『回想記』の中で、彼女の義母に対する憎しみが鋭い観察をさせた。ロングヴィル嬢の過ちは、ロングヴィル夫人が自らを超えようとしたかなり激しい欲求を、単なる虚栄心に帰したことである³⁴⁾。

デュロンの指摘する通り、もしわれわれがロングヴィル夫人のフロンドの乱における振舞いを、単なる英雄気取りと解するならば夫人を正しく捉えたとはいえない。夫人が現実をのがれ、自分を乗り越えようとする不断の意欲をもつ限り、かならず行く手を阻むものが立ち現われることであろう。そこに緊張と葛藤が生じる。それが彼女のレゾン・デートルであった。不幸なことに、ロングヴィル殿はそのような彼女の生を理解し得ず、また満足させることができなかった。マルシャックが少なくとも彼女の望みを叶えさせてくれたのである。

ここで明らかにしたいことは、彼女が現実をのがれたいとの意欲をもつのは、現実逃避ではなく、現実を超克する精神を意味する。しかも、これは個人的世界のみでなく、社会、政治世界を直視する精神に関わる。宰相マザランと太后妃アンヌ・ドートリッシュに対する対決、権力の抑圧に対する反発、マザランの「忘恩と偽善³⁵⁾」に対する怒りもそれから発している。

もちろん、フロンドの乱の遠因は1で述べたように国家財政の窮乏、物価の上昇による生活圧迫、重税に対する市民の不満であり、その解決の先頭に立ったのはパリ高等法院であった。しかし高等法院は王廷に裏切られ、弾圧を受けた。それ故高等法院は諸侯に同盟を呼びかけたのであるが、諸侯の王廷に対する不満と恨みは、高等法院や市民のそれとは性質を異にしているといわねばならぬであろう。ロングヴィル夫人を含め諸侯は、高等法院議員や市民の及ばぬ特権を享受しており、時の社会の実態の把握にはほど遠い。

たとえばラ・ロシュフコーについて、ピエール・キュアンツが犀利に指摘するごとく、王廷に対する復讐とロマネスクな武勲への嗜好からフロイド派に加わったと言える。

しかし、この政治活動は、ほとんどの場合、騒擾に過ぎない。彼がフロンド派に身を投じたのは彼の努めを正当に認め得なかった太后妃（アンヌ・ドートリッシュ）と彼が要求している諸特権を授けない王に復讐するためにフロンド派に身を投じたのであるが、それは幻滅からである。またそれは、とりわけ、率直に言えば、ロマネスクな武勲への嗜好によって行動するためである³⁶⁾。

彼の実際の参加の仕方は次の通りである。王廷への不満、恨みを晴らすためには、マザランに拮抗し得る諸侯に近づく必要がある。そこで彼は王国における「第一等級の星《une étoile de première grandeur》」であり、「負け知らずと評されたスペイン歩兵軍をロクロワで打ち破り、一日にして有名になっていた」未来のコンデ公であるアンギャン公の寵を得ようとしたが、それには「うってつけの仲介者」がいた。彼が愛していたロングヴィル夫人、アンギャン公の姉である。時に夫人は27歳、ラ・ロシュフコーは33歳であった。彼は恋と名声と武勲が手に入る好機であると読んだ。

確かに、民衆の政治に対する不満、高等法院の王廷に対する対抗に起因したフロンドの乱は、進展するに従って、民衆から遊離し、王侯の醜い権力争いの様相を呈し、戦争によって国土を

荒廃させ、民衆を苦しめた。しかしその中であって、ロングヴィル夫人の生き方は注目に値する。

コンデ家の姫、才智、容貌に勝れるのみでなく、野心に溢れ、二人の弟から敬愛され、多感でたじろかない意志をもち、諸侯たちを惹きつける魅力をそなえ、民衆にもヒロインとして崇められ喝采を受けるに足る女性、ロングヴィル夫人は、「この内乱の魂はなおもロングヴィル公爵夫人であった」と歴史的評価を受けるに応わしい人物であったといえよう。

フロンドの乱期における夫人の個性また精神を分析してきたが、2でたどった回心後の信仰生活のあり方にもそれらは色濃く現われている。もちろん野心や名誉欲は神への帰依により洗い流されてしまったとはいえ、親王家につながる公妃としての矜持をもち、自制心の強さ、判断力の中正さは回心前と変わらない。とりわけ、現実を越えようとする欲求は、現実の世界と安易な妥協を許さない厳しい身の処し方に示されている。彼女の取巻きすべてが、サン・ポール伯をロングヴィル公の世嗣ぎに推挙したにもかかわらず、しかも彼女自身同伯を「ひそかに熱愛していた³⁴⁾」にもかかわらず、頑として肯んぜず、デュノワ伯に襲爵・家督相続させたことがその証左であろう。この精神は彼女がフロンドの乱において、飽くまでも抗戦の姿勢を崩さなかったところに示されている。

以上、17世紀中葉において、ロングヴィル公爵夫人が、社会の根柢を変革するに足る思想を醸成するまでには到らなかつたとはいえ、また民衆の生活の実態を把握するまでには到らなかつたとはいえ、少なくともフロンドの乱の初期において、バリ高等法院の合理主義的思考に親近観を示しながら、王権に抗し、同乱を引き起こす首謀者の一人として、羈気と独立心を失わず、むしろ男性を鼓舞し、現実安住に甘んじなかつた生き方、そして回心後の改悛の生活に、時代を超えた一女性の誠実さを、また自由への渴望を垣間見ることができよう。

注

- 1) *Histoire populaire de la France, Tome troisième*, Librairie de l'Hachette et C^{ie}, 1863, p. 122.
- 2) Alain Decaux, *Histoire des Françaises*, Librairie Académique Perrin, I, 1972, p. 696. この科白は有名であり、後掲の Claude Dulong の *L'Amour au XVII^e siècle* にも引用されている。
- 3) *Ibid.*, p. 645.
- 4) Cécile Gazier, *Les Belles Amies de Port-Royal*, Librairie Académique Perrin, 1954, p. 67.
- 5) *Ibid.*, pp. 73-74.
- 6) *Ibid.*, pp. 71-72.
- 7) Claude Dulong, *L'Amour au XVII^e siècle*, Hachette, 1969, p. 97. セシール・ガジエは年齢差を25歳と述べているが、*La Grande Encyclopédie*, H. Lamirault et C^{ie}, Éditeurs, 1882-1902, 第22巻によると、ロングヴィル公は1595年4月生まれであり(夫人は1619年8月生)、再婚は1642年7月であるので、23歳違いが正しい。
- 8) *Ibid.*, p. 107.
- 9) *Idem.*
- 10) Hubert Méthivier, *Louis XIV*, P. U. F., 1968, p. 10.
- 11) *Ibid.*, pp. 108-109.
- 12) Arvède Barine, *La Jeunesse de la Grande Mademoiselle*, Librairie Hachette et C^{ie}, 1912, p. 263.
- 13) Claude Dulong, *Ibid.*, p. 95.

- 14) Ibid., pp. 95–96.
- 15) Ibid., p. 105.
- 16) Ibid., p. 106.
- 17) Ibid., p. 109.
- 18) Ibid., p. 88.
- 19) Ibid., p. 699.
- 20) Cuvillier–Fleury, *Nouvelles Etudes Historiques et Littéraires*, Michel Lévy Frères, Libraires–Editeurs, 1855, p. 198.
- 21) Ibid., p. 201.
- 22) Ibid., p. 208.
- 23) Ibid., p. 102.
- 24) Ibid., p. 209.
- 25) Idem.,
- 26) Ibid., p. 210.
- 27) Ibid., p. 108.
- 28) Ibid., pp. 108–109.
- 29) Ibid., p. 109.
- 30) Ibid., p. 110. Alalq Decaux の前掲書, *Histoire des Françaises* の p. 700 にも Madame de Sévigné の言葉が同じく引用されている。
- 31) Idem.
- 32) Ibid., p. 106.
- 33) Ibid., p. 97.
- 34) Idem.
- 35) Claude Dulong, Ibid., p. 95.
- 36) Pierre Kuentz, *La Rochefoucauld Maximes*, Bordas, 1966, p. 15.
- 37) 小論10頁参照。

Alain Decaux の著作からの引用文, 2) 3) 19) の邦訳は, アラン・ドゥコー著川田靖子訳『フランス女性の歴史1』大修館書店, 1980. を用いた。

原稿受理 1988年4月22日